

36. イルデフォンソ・セルダの著書「都市計画の一般理論」に至る計画概念についての試論

Essay on the planning concept toward the "General Theory of Urbanization" by Ildefonso Cerdá

阿部大輔*
Daisuke Abe

This article focuses on a series of planning theories built by Ildefonso Cerdá, who has been known as one of the most remarkable civil engineer-planners in the 19th century, and attempts to figure out difference and continuity among various theories starting from the City Construction Theory in 1859 toward the publication of the General Theory of Urbanization, the four-volume great work. In this process Cerdá gradually changed the weight of the argument from the physical equality in a urban space to the administrative equality between different landowners defining the rights and duties. Cerdá maintained or pursued his principle for political action as trade-off balance that was to harmonize the desirable vision with the achievable one when realizing his project.

Keywords: Barcelona, Ildefonso Cerdá, Urbanization, General Theory of Urbanization, Grid city
バルセロナ、イルデフォンソ・セルダ、都市化、都市化の一般理論、グリッド都市

1. 研究の枠組み

1-1 背景と目的

スペイン第二の都市バルセロナの市街地拡張プランが土木技師イルデフォンソ・セルダ (Ildefonso Cerdá, 1815-1876年) によって作成されたことは広く知られている。昨年2009年から今年2010年は、バルセロナの現在の市街地の原型となったプランの作成ならびに承認から150年にあたり、現地ではこの一年、セルダの業績に関する展覧会や出版が相次いでいる⁽¹⁾。

とはいえ、セルダより少し下の世代に属するR.バウマイスター (1833-1917年) やC.ジッテ (1843-1903年)、J.ステューベン (1845-1936年)、E.ハワード (1850-1928年)、P.ゲデス (1854-1932年) といった人物が近代都市計画の礎を築いた先人として一般的に認識されているにも関わらず、セルダをそのような文脈に位置づける論説は決して多くはない。現地で行われてきたバルセロナの拡張プランの詳細やセルダ自身の理論書の内容についての研究がスペイン国内に限定されがちであり、わずかにF.Choayがセルダの業績を頻繁に紹介しているのみである⁽²⁾。

邦語文献も文献1)~8)が先駆的研究として発表されているが、セルダ畢生の書である「都市計画の一般理論」の内容やその編纂に至るまでに執筆した数々の理論書の存在ならびそれらに見られる計画理論、さらに都市計画という用語の源流であり彼が編み出したとされる新たな科学技術としてのurbanización (ウルバニサシオン、都市化/都市整備の意味に近い) の構想当初の概念など、いまだ明らかになっていない点が多い。スペインの学术界においても既往研究の欠如あるいは偏りはしばしば指摘されてきた⁽³⁾。しかしセルダ研究の系統だった把握はいまだなされておらず、現段階での到達点は明らかではない。

そこで本稿では、セルダがプランの根拠として精力的に執筆した各種の理論書の展開やそこで示された計画概念の、街区設計などの物理的空間の特徴に留まらない包括的な特徴を明らかにする。具体的には、理論書の系譜、すなわち「バルセロナ拡張地区の基本構想に関する報告書」(以降、MAEBと表記する)(1855年)から「都市建設理論」(同様にTCC)(1859年)、「都市の道路ネットワーク理論」(TVU)(1860-61年)、「拡張地区に関するいくつかの言葉」(CPE)(1861年)そして大著「都市計画の一般理論」(TGU)(1867年)にまで至る各種報告書や理論書の内容と継承関係、連続性の解明を目的とする。

1-2 研究の構成と方法

本稿は以下の手順で論を進める。まず、セルダに関する既往研究の到達点ならびに研究上の空白を明らかにする(2章)。続いて、バルセロナの拡張のためにセルダが編み出した理論の系譜を辿り、提示された具体的な空間像を検討することで、その思想的・時代的背景を明らかにする(3章)。特に邦語による既往研究では、プランの物理的側面の特徴は論じられているものの、どういった理論的背景に基づいているかは明らかでないため、この点を明らかにしたい。

次に、理論書に見るセルダの計画思想の変遷を、彼が用いた専門用語に着目し、分析する(4章)。最後に、セルダが有していた現代的意義を試論としてまとめる(5章)。

セルダが残した理論書の数は膨大であり、それらはいずれも新たな概念としての「ウルバニサシオン」を編み出すまでのプロセスとして位置づけられる。理論書の一部には具体的な都市設計技術を盛り込んではいないものの、多くの作業は都市を新たに構築するための考え方に充てられている。その「考え方」の多くの部分は、各理論書に冠せられた用語の解釈によって明らかになるというのが、本稿がと

*東京大学大学院工学系研究科都市持続再生研究センター
Center for Sustainable Urban Regeneration, the University of Tokyo

る基本的な立場である。

本稿は末尾に示す各資料を用いて展開される⁴⁾。これらは現在でもすべての原文を参照できる唯一の資料である。その他、文尾に記した既往研究を多数活用する。

2. セルダ研究の研究史：既往研究の整理

スペインにおいてセルダを含め都市計画史研究が着手されるのは、TGUの初めての複製が出版された1968年以降のことである。以降のセルダ研究の系譜は以下に示す三段階に分けることができよう。

第一期は、TGUが1968年に三巻組で再販されたことで高まったセルダ再評価の動きと同期しセルダの計画原論を緻密に明らかにした世代であった。この時期を代表する研究者が、現在でもセルダ研究の第一人者と目されるA.Soria Puig¹⁹⁾やS.Tarragóである。また、M. de Solà-Morales¹⁸⁾をリーダーとし、バルセロナ建築学校内に設置された都市計画研究所は、セルダに関する国際企画展を担当する中で多くの研究蓄積ならびに人材を後の世代に残すことになった⁵⁾。

第二期は、上述の都市計画研究所を中心に活動を展開した若手研究者による論文の出版が相次いだ1980年代半ばから1990年代初頭である。この時期の代表的な論文として、拡張地区の建設を推進した拡張事業会社の活動を明らかにした文献¹²⁾、パリとバルセロナの建築規制を詳細に分析した文献¹⁷⁾などが挙げられる。これらの研究は、拡張地区建設の起源を詳細に明らかにする点できわめて重要であり、セルダ理論の有効性を再解釈するものであった。同時に、文献9)のように、現状の都市問題とセルダの業績、理論を結びつけて考察しようとする研究も出現し始めたのがこの時期である。

第三期は原論研究が一段落を見せ、セルダの計画理論に関する史料的検証をより洗練させ、かつ現代都市との関連を問う展覧会が精力的に展開された1990年代以降である。これら展覧会は、その後の精密な研究書の出版と一体であった^{10), 13)}。こうした研究の系譜は、当時わが国の国土交通省に相当した勸業省からのセルダに関する総合的研究書の出版¹⁶⁾でひとつの到達点を迎えたと言える。

とはいえ、本稿で活用するTCCならびにTVUの理論書が初めてまとまって公表されたのが1991年だったこと、多くの研究が着目したのがセルダの理論的到達点である都市計画の一般理論だったことなどから、本稿のようにセルダの著作間に見られる思想の変換点あるいは連続性を明らかにしようとする研究は現在でも稀少である。

セルダによるバルセロナ拡張計画について言及している邦語の基礎文献として1)-8)が挙げられるが、本稿が着目するTGUの詳細やその前段階の論考となったTCCならびにTVUの内容にまで踏み込んでいる論文は不在である。

3. バルセロナ拡張プランの包括的特徴とその理論的背景

3-1 セルダの理論書の系譜

1854年にバルセロナの市街地を取り囲んでいた城壁の

取り壊しが決定され、城壁の外側に広がる平野の測量図の作成がセルダに依頼された。翌年発表した「バルセロナ近郊の測量図」⁶⁾に、彼は「バルセロナ拡張地区の基本構想に関する報告書」(MAEB)を同封する。MAEBはセルダの都市像が如実に表れたおそらくは最初のまとまった文書である。MAEBは理論形成を目的にした文書ではないものの、当時、すでに十年以上も都市問題に関心を寄せていたセルダは、MAEBによって独自の計画理論の導出へ向けて最初の一步を踏み出したのである。

すでに理論の必要性を察知していたセルダは理論と実践の両者を同時に、そして深く追求し始めることとなった。その最初の「実践」が有名なバルセロナ拡張プランであり、最初の「理論」となるのがプランの作成と平行して1856～58年にかけて執筆され、プランと同年に発表された「バルセロナの改善と拡張に適用された都市建設理論」(TCC)であった。1855年のMAEBは「拡張」のみを構想していたが、セルダ計画として知られる1859年の拡張案(図1)は、正式な名称を「バルセロナの改善ならびに拡張プラン」ということから分かるように、既成市街地の改善ならびに新たな都市の拡張の両者を今後の都市改造に際して外すことのできない両輪として捉えている。当時では極めて稀な、都市全体を構想するという視点を内在していたのである。こうした総合的な視点で都市を捉えることを可能とした背景には、セルダ自身が独自に調査した「1856年のバルセロナの労働者階級に関する統計書」(1868年出版)の存在が不可欠であった。この調査によって明らかになったことは、劣悪な居住環境ゆえ、労働者階級の平均寿命はわずかに17歳であったことである(中産階級のそれは倍の34歳だった)。また、この統計書は、住環境に恵まれない労働者層は裕福層に比べて平米あたり30%以上も賃料を払っている現状を明らかにしている(文献10,p.5)。

とはいえ、TCCを読解すると、その内容の多くは都市を構成する基礎的な単位としての街区ならびに住宅の考察に充てられていることが分かる。当時、より多くの複雑な問題を抱えていたのは、言うまでもなく城壁に囲まれた旧市街だったが、セルダは旧市街の改善についてよりも都市の拡張に関する理論構築に多くの時間を費やしたのであった。この経緯から、改善と拡張の両方を掲げた当初の意図が不完全燃焼であり、ゆえにセルダが改善についてより深い洞察を加える機会を欲していたと考えるのは、決して不自然ではない。事実、セルダは1859年の拡張プランの承認手続きを申請した直後の1860年代初頭に、マドリードの旧市街の改善の研究調査に着手している。当時、マドリードの拡張地区はセルダの省庁時代の同僚でもあった建築家カルロス＝マリア・デ・カストロ(Carlos María de Castro)によって計画が進められていた。マドリードについての考察はまた別の理論書、「道路ネットワーク理論ならびにマドリードの改善」(TVU)として1860～61年にまとめられた。

これら理論書の数年前に発表しているMAEBが極めて土木技師の専門的観点からまとめられているのに対し、こ

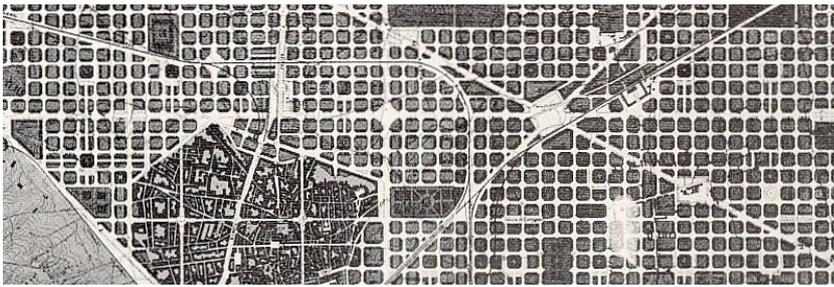


図1 バルセロナの改善ならびに拡張プラン (1859年) (Arxiu Històric de la Ciutat 所蔵)

の時期のセルダは 1859 年のプランにその実現を支える「警察権条例」(OPU, 1859 年)、「建設条例」(OCB, 1859 年)ならびに「経済考察」(PEc, 1860 年)を付随させ、全体計画として構成している。セルダは、『よい構想も、それを実現するための明確かつ有効な手だてならびに十分な資金が伴わなければ、まったく意味がない』(PEc, 2) こと、『専門的な科学と経済の間に存在する関係性は非常に緊密であるので、経済的に不都合なことが技術的によいということとはありえない』(PM, 頁なし) という理解に立っていた。セルダは「経済考察」において、権利関係者の受益と負担の公平な配分を念頭に置き、あらゆる都市改造は開発利益に応じて出資されるべきだとする方針を発表する。

セルダは続く著書「拡張地区についてのいくつかの言葉」(CPE, 1861 年)において、農村的な性質の土地を新たな交通手段に適する建設可能な都市的な区画へと改変する際に求められる、地権者の得る利益と果たすべき義務の適切な配分を論じている。そして地権者の受益と負担の公平な配分を達成し建設可能な土地を獲得するための手法として、補償制度と土地再区画整理の技術を提案するに至った。

これら TCC, TVU, CPE といった各種の理論は、まずは 1861 年に当時の内務省の大臣だったポサーダ・エレラ (José de Posada Herrera) による「市街地の改善・拡張・衛生法」に投影された。続いて、勸業省の機関誌「公共事業雑誌」(ROP) に掲載された「市街地の改善・拡張法」(1862 年 3 月) や「交通循環ならびに街路における住民のニーズについて」(NCV, 1863 年) へとその技術的内容を蓄積していき、これらは最終的に 1864 年の「市街地拡張法」(Ley de Ensanche de poblaciones) として全国に公布される。

バルセロナ拡張プラン以降したためてきた各種の理論は、彼自身がウルバニサシオンと名付けた、都市の発展の原理的メカニズムをその名に冠した「都市計画の一般理論」へと結実するのである。

3-2 バルセロナ拡張プランに見る都市モデル

それでは、セルダはどのような理論を背景に、どのような新たな都市像を構想したのだろうか。以下、上述した理論書ならびに TGU の読解から、セルダが理論構築に力を注いだ、都市が備えるべき原則、すなわち拡張地区を象徴する革新的な都市モデルを記述する。

(1) グリッド構造

セルダが拡張プランを作成するにあたり最初に用いたの

が盤目状の都市構造である。グリッド都市は歴史的に最も古くから見られる形態であるが、セルダの考えによれば、それゆえにグリッド構造は何千年と積み重なってきた歴史の総決算を示しており、そこには学ぶべき合理性があるとセルダは理解していたと考えられる。例えば TCC において世界のグリッド都市の図面を用意し、そのスケールを横断的に比較している⁷⁾。

前節でも見たように、セルダのあらゆる理論の基盤をなしているのは「平等性」の考えである。街区の形態もこの平等性の観念に依っている。セルダにとって、『街区の平均的な形態は正方形』(ROP, XII, p.19) が最も合理的だった。というのも、グリッド構造は『距離や容量を等しく施す唯一の形態である。...数学的に平等であり、これは権利と利益の平等であり、まさに本来的な意味での正義』(ROP, XII, p.44) であり、『いかなる街路に対しても、忌むべき人工的な優先権を付与しないという計り知れない利点を持つ。あらゆる街路、そしてそれらを区切るあらゆる街区において行き渡った平等性ならびに完全な公平さでもって、移動ならびに建設の利益を配分してゆく』(TVU, 1861, 695) ものとして捉えていた。

こうした平等性の考え方は、『19 世紀は移動の世紀である...今日、すべてが移動や拡大、伝達に関連している』(TGU, I, 275) という時代認識によっても強化されている。新たな移動手段の登場が従来の距離の感覚を急激に変えつつあるなか、セルダにとって『道路の最も基本的な決まりは、連続的に移動すること』(TVU, 811)、『どのような道路であれ、同じ種類の道路とだけではなく残りの種類の道路とも常に絶えることなく連続している』(TGU, I, 538) のであり、この点からもグリッド構造はまさに理想的なものとして位置づけられたのである。

(2) 街路と街区

セルダはまた、街路を『住居にとって欠かすことのできない付属物であり、必要な補完物である』と理解していた。なぜなら、街路は住宅に『見るための光、吸うための空気、楽しむための眺め、そして交流と社会性を発揮するあらゆる手段』を提供するからである (ROP, XI, pp.151-152)。統計的な分析調査のおかげで、セルダは高い死亡率の原因が建造物における日照の欠如にあることが分かっていた。状況の改善のためには、『どの側面においても最大の日照を享受できる(注:街区の)傾きを模索する』必要があった (ROP, XII, p.42)。それを実現するための最適な傾きが、正方形の対角線であった。セルダのプランにおいて、街区を斜めに走る対角線は方位点に一致しているのである (図1)。

TGU によれば、『街路が全体として、絶え間なくひとつのまとまりを構成しており...ひとつのネットワークをなしているのであれば、必ずや、街路によってはめ込まれ、街路によって合流し、結びつく空間があるはずである』

(TGU, I, 362)として、そうした空間の詳細な検証の必要性を示唆している。セルダは『われわれは、道路網の決定的な要素として「街路」(vias)をその幅員と面積とともに想定し、その街路によって囲まれた「街区間」(intervías)を特別な要素として考える』(TGU, II, 691)ことを新時代の都市設計原理として位置づけた。セルダは街区の概念に原義的には「通りの狭間」を意味する *intervías* と名付けたことから分かるように、街路と街区は都市の発展を支える相互に不可分の存在として理解されていた。

(3) 街区の設計：パティオと交差点

セルダは街区の中に不可分の存在を見いだす。それがマッス空間としての住宅建築とボイド空間としての庭園であった：『街区の存在は、通りや採光のためのパティオのような、それを補完する空間との共存なくしてはありえない』

(TGU, I, 685)。区画の中に建築物と庭園を配置する形は時期によってまちまちであるが、街区の構成要素がこの二つであるというセルダの確信は一貫していた。セルダはこの考え方を「都市的なもの(建築物)を農村化し、農村的なもの(庭園)を都市化せよ」と表現した。

パティオの創出には、住宅から出る汚れた空気を十分に換気する狙いもあった。街路が通行や旋回や循環、交流の空間である一方、中庭空間は遊びや散歩、休憩といった要求を満たす空間として位置づけられる。こうした理由により、拡張地区の街路は確固たる構造となり、移動の連続性を担保するという基本的な役割を果たせるようになる。セルダは街区を街路と補完的な空間、静的な空間として捉えていたことがよく分かる。

交差点の処理も、セルダの構想した拡張地区の空間を特徴づけている。20mの街路の交差点の面積は400m²となるが、二方向からの交通動線の混雑を避けるために、交差点の面積は二倍となるべきだとする(TVU, 814)。その場合、街区の角地を切る隅切りを施し、交差点の面積を増加することになる。

4. 理論書にみる計画思想の変遷

前章ではセルダの構想した都市モデルの構成要素を明らかにしたが、街区や街路といった要素はその後の形態の変更こそあれ、その空間的表出という点においては、さほど大きな差異は確認できないと考えられる。

ただし、その名に「理論」(*teoría*)を冠している著作に着目すると、その名称は1859年の「都市建設」、1861年の「都市の道路網」、そして1867年の「都市化」(ウルバニサシオン)へと変化している。そこには何かしら計画概念の変化が認められはざである。それは一体どのような変化だろうか。本章ではこの点を検証したい。

4-1 「都市建設理論」(TCC, 1859年)

2章で見たように、TCCはそれ以前の「図面/プラン」(*Plano*)や「プラン/プロジェクト」(*Proyecto*)といった、より個別の行為や内容を示す表現に代わり、初めて科学的志向を表す単語として「理論」を掲げた文書である。

TCCにおいてセルダが目指したのはそのタイトル通り都市の建設についての理論構築だったが、その記述においては建設 *construcción* との用語を一貫して用いているわけではなく、例えば『住宅や都市のシステム』(TCC, 4)や『都市の設立』*fundación* (TCC, 1419)、『建造』*edificación* (TCC, 1418)、『整序』*arreglo* (TCC, 1519)など、その用い方にはいくぶん揺らぎが見られるのである(文献16, 156)。

4-2 「都市の道路ネットワーク理論」(TVU, 1860-61年)

TCCと比べて、TVUには「新たな科学」の創出を目指すセルダが独自の造語を生み出し、計画概念の複合化も図るなど、より挑戦的な内容となっている。

第一に、TVUに入ると、セルダはもはや建設という言葉は用いず、『都市建造の一般理論』(TVU, 846)に見られるように代わりに建造/構築 *edificación* を充てる。この建設から建造への術語の変化に対しては、前者はより規模の大きい土木技術的なプロセスを指したり、また都市空間の建設以外の意味も幅広く含んだり、より抽象的な意味合いが強い一方、後者はより具体的な物的環境の形成、踏み込んで言えばより建築的な構築プロセスを指す、との説明が可能だろう。TVUでは建設を術語として用いていないという事実は、TVUの論点は広い意味での空間形成ではなく、より個別具体的な居住環境の形成に置かれていたと考えることができそうである。すなわち概念の具体化がここでは見られるのである。

第二に、TVU以前の著書では、「都市の/都市的な」を表現する際には *de la(s) ciudad(es)* のように名詞形で活用しており、形容詞的活用の *urbano* をほぼ用いていなかったが、タイトルにも冠しているように、TVUには一貫してこの用語が頻出する。この用語の変化はセルダの計画概念のひとつの大きな転換点であると考えられる。というのは、この変化は、可視的な対象、あるいは物理的現象としての「都市」*ciudad* の捉え方から、「都市的なもの」*lo urbano* への移行を示しているからである。1867年のTGUに至る過程は、都市化の理論 *teoría* がより普遍的 (*general*) なものとなる、まさに概念の抽象化プロセスであるが、目指すべき状態としてのウルバニサシオン-*urbanización*-は、「都市」そのものをつくるのではなく、「都市的なもの」をつくりだすという語感を秘めていると考えられる。

TVUの主題を示している *viabilidad* はセルダが生み出した術語であり、すでにTCCの段階で極めて限定的にはあるが用いられていた(TCC, 6, 1216-17)⁶⁾。TVUの文脈では道路網や交通ネットワークに近い意味で用いられている(TVU, 545-590)。文献16)によれば、*viabilidad* には全体性や構造軸といった概念をも内包する。つまり *viabilidad* を検討するということは、元来の道路網を踏まえ、地域の基本的骨格となる新たな交通網を設計することでもある。

TVUの場合、マドリードの旧市街を対象とする理論であり、一方TCCはバルセロナの拡張地区の「建設」に適用するための理論であった。*viabilidad* には稠密市街地に介入する形で道路空間を挿入し、周辺に新たに建造物を創出する

ことで都市的な道路性とでもいうべき質を産み落とす所為であると言うこともできよう。TVU において建設行為は *edificación* の用語で表現されていることはすでに述べたが、こうした街区の建造を含めた所為を TVU は「居住性」*habitabilidad* と総称し、この概念と *viabilidad* を互いに自律的だが切り離せない関係にある都市形成要素として位置づけている (TVU, 842; 926)。いずれにせよ、セルダは 1860 年代初期の段階で、当時の都市が対処すべきテーゼとして自身が掲げた「改善」と「拡張」のいずれに対する試論的著作を執筆し終えたのであった。

4-3 「都市計画の一般理論」(TGU, 1867 年) へ向かって

TVU 以降、モビリティの理論をさらに発展させた「交通循環ならびに街路における住民のニーズについて」(NCV, 1863 年) という報告はあるものの、大部の理論書としては TGU まで大きな動きはない。

ただし、セルダは、バルセロナやマドリードにおいて構築したこれら理論を、それ以外の都市にも敷衍可能な状態にするために、内容の改善、洗練に取りかかる。その一環として、TVU の発表後はむしろ、それまでの空間形成やインフラ網の形成理論ではなく、それらをいかに実現していくのかという法律的、経済的基盤の整備に徐々に力を注いでいく。バルセロナを対象に、地権者の公平な受益と負担の配分を実現するために区画整理の手法を提言した CPE (1861 年 5 月)、その直後にマドリードを対象に同様の計画技術を提案した「マドリード拡張地区におけるさらなる言葉」(CPM, 1861 年 11 月) を発表している。

新たな科学としての「都市化」の概念について初めて記述されたのは、おそらく TVU の 338 項においてであった。その文書中、「都市化」に注釈がつけられ、『ウルバニサシオンという単語はいかなる辞書にもないが、当てはめるべきよい単語が見当たらないような新たな考えを表現するために、われわれはそれを使う必要がある』ことが指摘されている。『数の大小や規模の大小を問わず、住宅の集まりのことである』ウルブス *urbs* と呼ばれる単位を基礎に、都市を以前とは違った形に変えていく行為に対し、「都市化する」という動詞の名詞形を充てたのであった。

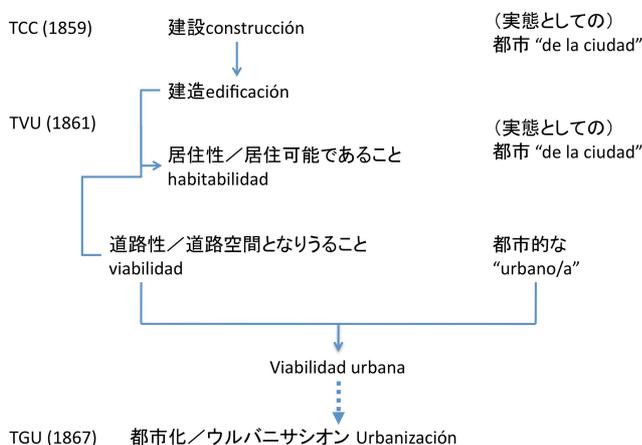


図2 用語に着目したセルダの計画概念の変遷

さて、その都市化を実現するための理論的基礎は、TCC から TVU を執筆する中で継承された居住性の概念、そして TVU において構築した道路網理論に加えて、その実現手段として模索、提案された財政政策や区画整理手法によって形づくられたと考えられるのではないだろうか。事実、TGU においても都市化を『ウルバニサシオン：これらは住民が快適に暮らし、相互サービスを利用し、やがては社会福祉に貢献することができるように、あらゆる建造物の集合体を取るべき方向性を指し示す、知識や原則、主張や規則の集合体』(TGU, I, 32) として定義しており、これはまさに空間をどうつくるかという技術的側面のみならず、より政策的、経済的な観点を盛り込んだ包括的な都市のビジョンとなっている。

4-4 理論と実践の捉え方

十年以上にわたり精力的に理論構築を試みたセルダだが、純粋に理論面の不備や改善の可能性のみに着目したのではない。そして『絶対的な主義・原則は理論的には正しいのだから、私はこれまで実現可能なそれを見たことがない』(OCB, 11) との記述からも分かるように、自らの理論に絶対的な価値を置いていたわけでもなかったのである。

理論書執筆の過程においてセルダが重要視したのは実践からのフィードバックだった。『理論を構築した後でも、私は自身の仕事を依然として完了したとは考えなかった、なぜなら、...移行から譲歩への道を切り開く実際的な手段によって、理論そのものが実現可能かつ有効なものとなるよう、理論上の原則が内在する硬直性を取り除くことが必要だったからである』[下線筆者](TGU, I, 17)。ここで下線部の言う「移行」(*transición*) と「譲歩」(*transacción*) とはどのようなことだろうか。「移行」とは、端的に言えば、理想の実現がより容易になるのを時間的に待つという姿勢のことであり、セルダの考えの核心をなしている。「移行」と「譲歩」は、論理的な理想を各段階での現実と調和させるための、対になる概念であった。理想はもちろん目標像を描くことだが、現実理想と現状のあいだでの譲歩を求める。例えばセルダはバルセロナ拡張プランの当初、街区の二側面のみを建設を構想していたが、その実現に対しては社会情勢の変化や地権者の反発など外部要因が強く影響した。しかし、あくまで自らの案に固執するのではなく、逆に自らの理想から着想を得て、16 の街区パターンを考え、現状を改善する方法に進もうとしたのである。

5. まとめ

セルダの計画理論は、セルダが構想した空間モデルを支えたのは平等性という概念に支えられていた。街路や街区へのアクセスといった空間上の平等性だけでなく、事業を実施する際の権利関係の平等性にまで至るまで、その考えが徹底されている。また、プランが画餅に帰することのないよう、その実現を支える法的基盤(各種条例)ならびに財政的基盤(区画整理)を整備した。TGU にて結実するセルダの計画理論は、こうした基盤をも網羅しながら、計画か

ら事業実施に至るまでの都市化のプロセスを包括的に捉えたものであった。

セルダの著書に見る各種理論の継承関係は、主に新たな造語を生み出すことで弁証法的に洗練されていくプロセスを辿った。特に重要だったと考えられるのがTCCからTVUに至るときであった。物的な対象として名詞としての「都市」 ciudad を術語として用いていたTCCに対し、TVUでは形容詞としての「都市」 urbano を用いることで、より総合的な視点を盛り込んだ新世紀の都市のあり方を提示している。この urbano の概念の導入があり、併せて財政政策を踏まえた継続的なメカニズムとして理論を発展させる中で、動的に都市の形成を捉える視点、すなわち都市化＝ウルバニサシオンの単語が紡ぎ出されたと考えられる。

また、事業の進め方については、「移行」と「譲歩」の考え方を導入したことで、元来の構想に固執しない柔軟な内容の修正ならびに理論の展開が可能となった。様々な経緯で当初の計画とは大きく異なる姿となった現在のバルセロナであるが、それでも当時のセルダの理論の痕跡を明確に読み取ることができるのは、彼が情勢に応じて提案の形態を細かく変化させながら適用していくプロセスを想定していたことが大きく影響しているものと考えられる。

謝辞

本研究は平成19～21年度科学研究費補助金若手研究(B)「イルデフォンソ・セルダ著『都市計画の一般理論』に見る計画理念とその現代的意義」(課題番号:19760421)の成果の一部である。

補注

- (1) バルセロナ市は2009年から2010年6月までを「セルダ年」(Any Cerdà)として様々な展覧会や会議を自治州や現代文化センター(CCCB)などと協働しながら開催している。
- (2) フランソワーズ・ショエ:『近代都市 19世紀のプランニング』(彦坂裕訳、井上書院、1983年)
- (3) Manuel de Solà-Morales は、セルダの理論書の選書の冒頭に寄せた論説(Cerdà, TCC)において、研究の偏りや硬直性がセルダの業績や理論の普及を今日に至るまで困難なものとしていることを指摘している。
- (4) 書籍情報の示し方について、おおよその理論書は各段落に番号が付与されており、本稿では理論書の略記とともにそれを示した。ただしROPについては番号による整理ではないため当該頁数を示すpを付与している。
- (5) 都市計画研究所は、ベルリンにて1976年に行われた欧州評議会における「19世紀の欧州大都市の保全」展に際して、バルセロナ拡張地区の起源と建設過程についての展示を担当し、その後も精力的な研究を展開した。
- (6) Plano topográfico de los alrededores de Barcelona
- (7) セルダはTCC(1859:1212)において、世界の都市の街路幅員を整理している。対象となったのは、マドリード、トリノ、パリ、ロンドン、エジンバラ、ワシントン、ニューヨーク、ニューオーリンズ、ボストン、フィラデルフィア、ガテマラ、プエノスアイレス、リマであった。また、『フィラデルフィアは、アメリカにおいてだけでなく全世界的に見ても最も規則正しく美しい都市である』(TCC, lámina XLIII, 1859)と述べている。
- (8) viabilidad は、「交通/道路」を意味する vial の形容詞である viable をさらに名詞化した構造になっている。

引用・参考文献

- セルダの文書の引用については、以下に示すローマ字の略記を用いる。
- [MAEB](1855): *Ensanche de la Ciudad de Barcelona. Memoria descriptiva de los trabajos facultativos y estudios estadísticos hechos de orden del Gobierno y consideraciones que se han tenido presentes en la formación del Anteproyecto para el emplazamiento y distribución del nuevo caserío*, en *Teoría de la Construcción de las Ciudades. Cerdà y Barcelona* (TCC), vol.I, pp.51-106, 1991
 - [TCC](1859a): *Teoría de la Construcción de las Ciudades aplicada al Proyecto de*

- Reforma y Ensanche de Barcelona*, en TCC, vol.I, pp.107-455, 1991
- [OCB](1859b): *Ordenanzas municipales de construcción para la ciudad de Barcelona y pueblos comprendidos en su ensanche*, en Cerdà (1991a, 513-546)
- [OPU](1859c): *Ordenanzas municipales de policía urbana para la ciudad de Barcelona y pueblos comprendidos en su ensanche*, 479-512
- [PEc](1860): *Pensamiento económico*. Primera edición: Cerdà (1991a, 457-471)
- [TVU](1861a): *Teoría de la Viabilidad Urbana y Reforma de la Madrid. Estudios hechos por el Ingeniero D. Ildefonso Cerdà, autorizado al efecto por el Real Orden de 16 de Febrero de 1860. Madrid y enero de 1861*, en: *Teoría de la Viabilidad Urbana*. Cerdà y Madrid (TVU), Vol.II, pp.45-280, 1991
- [CPE](1861b): *Cuatro Palabras sobre el Ensanche, dirigidas al público de Barcelona por Don Ildefonso Cerdà*, en: TCC.C+B, vol.I, pp.577-589, 1991.
- [CPM](1861c): *Cuatro palabras más sobre las dos palabras que Don Pedro Pascual de Uhagón ha dirigido a los propietarios de los terrenos comprendidos en la zona de ensanche de Madrid*
- [PM](1862): *Informe para el Gobernador Civil de la provincia sobre el proyecto de "Boulevard de circunvalación" del casco antiguo de Barcelona de Miguel Garriga y Roca*
- [NCV](1863): "Necesidades de la circulación y de los vecinos de las calles con respecto a la vía pública urbana y manera de satisfacerlas", Madrid, *Revista de Obras Públicas*, tomo XI
- [ROP](1864) "Proyecto de ley para declarar ciertos beneficios a los terrenos comprendidos en la zona de ensanche de las poblaciones", Madrid, *Revista de Obras Públicas*, Tomo X, No.6 de 15 de marzo
- [TGU](1867): *Teoría general de la urbanización y aplicación de sus principios y doctrinas a la reforma y ensanche de Barcelona, 1867 / reedición facsímil por Estapé, Madrid, 1968*
- [EsOB](1868): *Monografía estadística de la clase obrera de Barcelona en 1856. Espécimen de una estadística funcional de la vida urbana con aplicación concreta a dicha clase*, Madrid, Imprenta Española.
- 1) 山道佳子ほか:『近代都市バルセロナの形成—都市空間・芸術家・パトロン』、慶應義塾大学出版会、pp.25-66、2009
- 2) 鈴木隆:「セルダとバルセロナ整備拡張計画」、『都市をつくった巨匠たち シティプランナーの横顔』、ぎょうせい、pp.29-33、2004
- 3) 丹下敏明:「セルダのバルセロナ計画」、A+U(2), pp.18-19、1975ならびに「バルセロナの知られざる都市計画家 イルデフォンソ・セルダ」、A+U(11), pp.19-26、1976
- 4) 阿部大輔:『スペインの歴史的市街地における保全再生戦略に関する研究』、東京大学大学院工学系研究科博士論文、2006
- 5) 阿部大輔:『バルセロナ旧市街の再生戦略』、学芸出版社、2009
- 6) 阿部大輔・熊谷亮平:「バルセロナの計画住宅市街地における維持管理の手法と実態」、住宅総合研究団研究論文集、No.36, pp.119-130, 2010
- 7) 中川グラフィエラ・アナほか: "The influence of Ildefons Cerdà's concept on the actual Barcelona city -The viewpoint of Street-Block System", 日本建築学会技術報告集、第15号、pp.235-240、2002
- 8) 中渡憲彦ほか:「Barcelona 都市計画(1859)とCatalonia 建築思潮(19-20初頭)の展開について」、日本建築学会北海道支部研究報告集、No.62、pp.181-184、1989
- 9) BUSQUETS, Joan., Gómez Ordóñez, J.L., *Estudi de l'Eixample*, 2vols, Ajuntament de Barcelona: Barcelona, 1983
- 10) Colegio de Ingenieros de Caminos, Canales y Puertos. *Catálogo de la Exposición Ildefonso Cerdà*, Barcelona: Sirvensae, 1976
- 11) Colegio de Ingenieros de Caminos, Canales y Puertos. *1859-2009. El "Ensanche" de Cerdà*, en Ingeniería y territorio, 2009.
- 12) Corominas i Ayala, Miquel. *Los orígenes del Ensanche de Barcelona. uelo, técnica e iniciativa*, Barcelona: Edicions UPC, 2002
- 13) Laboratorio de Urbanismo de Barcelona (compil). *Treballs sobre Cerdà i el seu Eixample de Barcelona*, Barcelona: Ajuntament de Barcelona / Ministerio de Obras Públicas y Transportes, 1992
- 14) Magrinyà, Francesc; Tarragó, Salvador (eds). *Mostra Cerdà. Urbs i territorio. Una visió al futur*, Barcelona: Electa, 1994
- 15) Magrinyà, Francesc; Marzá, Fernando. *Cerdà. 150 anys de modernitat*, Barcelona: Fundació Urbs i Territori Ildefons Cerdà, 2009
- 16) MINISTERIO DE FOMENTO. *Cerdà y su influjo en los ensanches de poblaciones*, Madrid: Ministerio de Fomento, 2004
- 17) Sabaté, Joaquim. *El proyecto de la calle sin nombre*, Barcelona: Fundación Caja de Arquitectos, 1999
- 18) Solà-Morales i Rubió, Manuel de. *Los ensanches (I). El ensanche de Barcelona*, monografía 0.19, Barcelona: LUB-ETSAB, 1976
- 19) Soria, Arturo. *Las cinco bases de la teoría general de la urbanización*, Barcelona: Electa, 1996